

K-565

米沢市埋蔵文化財調査報告書 第71集

# 大浦C遺跡 発掘調査報告書

大浦 C 遺跡 第 V 次 調査

2000

米沢市教育委員会

# 大浦C遺跡 発掘調査報告書

大浦 C 遺跡 第 V 次 調査

2000

米沢市教育委員会



## 序 文

本書は民間の集合住宅造成に係わる委託事業として、米沢市教育委員会が実施した大浦C遺跡第V次調査の調査報告書です。

大浦C遺跡は本市の北東部を流れる最上川（松川）と羽黒川に掘立川が合流する位置にあたります。発達した河岸段丘上にあり、昭和59年に第1次調査を実施し、奈良時代の遺跡を発見しました。その後、平成元年に第2次調査、平成2年の第3次調査、平成3年には第4次調査を実施し、特に第3次調査区からは奈良時代の掘立柱建物跡が9棟発見されたことから、大浦Bと密接な関係があるものと考えられております。

今回の調査は一連の調査区範囲の中では最も南に位置する場所であり、県道が東西に走っております。近くに国道13号線のバイパス交差点があり、一日中車の流れが絶えない地区です。調査では奈良時代の溝跡、近世の井戸跡等が発見されました。遺物としては土師器類の他に陶磁器も出土しました。

文化財は、祖先が残したかけがえのない遺産です。この国民的財産である文化財を保護し、さらに郷土の歴史の中で培われた文化を後世に引き継ぐことは私達に課せられた責務と考えております。

近年、道路や宅地造成等の事業に伴い発掘調査を必要とする事例も増加の傾向にあります。本市としましても、適切に対処するとともに、文化財保護のためさらなる努力をいたす所存ですので、今後ともご支援ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

最後になりましたが、調査において格別のご協力をいただきました文化庁、山形県教育庁文化財課、(株)米住建設並びに地元の方々に心から感謝申し上げます。

平成12年3月

米沢市教育委員会

教育長 佐藤政一



## 例　　言

1. 本報告書は、集合住宅開発に伴う緊急発掘調査として、米沢市教育委員会が実施した大浦C遺跡第V次調査の発掘調査報告書である。
2. 調査は開発原因者受託事業として米沢市教育委員会が実施したものであり、期間は平成9年12月8日～同12月16日までの延9日間であった。
3. 調査体制は下記の通りである。

調査主体 米沢市教育委員会  
調査総括 舟山豊弘（文化課長）  
調査担当 手塚孝（文化課文化財係主任）  
調査主任 菊地政信（文化課文化財係主任）  
調査参加者 黒沢富雄 黒沢栄美子 佐藤四郎 武田房次郎 松本三郎 高橋信子  
事務局長 小林伸一（文化課長補佐）  
事務局 山本卯（文化課文化財係長）  
平間洋子（文化課文化財係主査）  
調査指導 文化庁 山形県教育庁文化財課  
調査協力 中田地区（株）米住建設

4. 挿図縮尺は、各図にスケールを示した。遺構平面図の方位記号は真北に統一した。
5. 本報告書で使用した遺構、遺物の分類記号及び遺構等の図化は「米沢市埋蔵文化財報告書第15集」に沿っている。
6. 遺構等の土層については、「新版標準土色表」（小山、竹原1973）等を参考にした。
7. 本調査により出土した遺物については整理し、米沢市埋蔵文化財資料室（米沢市万世町桑山269-3）に一括保管している。
8. 本報告書の作成については菊地政信が担当し、長澤由紀が補佐した。編集は菊地が行ったが、全体については手塚孝が総括した。責任校正には岡本善彦がその責務にあたった。
9. 今回の調査は大浦遺跡群としては第14次になる。大浦C遺跡では、第V次となるので大浦C第V次調査と呼ぶことにした。



# 本文目次

序文	
例言	
本文目次	
1 遺跡の概要	2
2 調査の経過	4
3 検出遺構	4
4 出土遺物	13
5 まとめ	21
参考文献	24
報告書抄録	25

# 挿図目次

第1図 大浦C遺跡位置図	1
第2図 大浦遺跡調査 全体図	3
第3図 大浦C遺跡第Ⅰ次調査 遺構全体図	5
第4図 大浦C遺跡第Ⅱ次調査 遺構平面図(1)	6
第5図 大浦C遺跡第Ⅲ・Ⅳ次調査 遺構平面図(2)	7
第6図 大浦C遺跡遺構全体図	8
第7図 大浦C遺跡第V次調査 遺構全体図	10
第8図 大浦C第V次調査 遺構平面図(1)	11
第9図 大浦C遺跡第V次調査遺構平面図(2)	12
第10図 大浦C遺跡第Ⅱ・V次調査出土遺物実測図(1)	14
第11図 大浦C遺跡第V次調査 出土遺物実測図(2)	15
第12図 大浦C遺跡第Ⅲ次調査 出土遺物実測図(3)	16
第13図 大浦C遺跡第Ⅲ次調査 出土遺物実測図(4)	17
第14図 大浦C遺跡第Ⅲ次調査 出土遺物実測図(5)	18
第15図 大浦C遺跡第Ⅲ次調査 出土遺物実測図(6)	20

# 図版目次

図版1 遺構全景, DY5, KY4~6セクション状況	
図版2 KY4・6セクション状況, KY4・6セクション状況近景	
図版3 近代井戸遠景, 近代井戸跡近景	
図版4 KY1・2完掘状況, KY1近景	
図版5 DY5半裁状況, DY5完掘状況	





第1図 大浦C遺跡位置図

## 1 遺跡の概要（第1・2図）

本遺跡は、米沢市街の北東に位置する。米沢市役所から約2kmの距離にあり、米沢市中田町宇大浦地内に所在する。

遺跡の西を堀立川、南を松川（最上川）、東を羽黒川が流れ、遺跡の南約400m地点で松川と堀立川が合流し、さらに東側約600m地点で羽黒川が合流している、遺跡はこれら3河川によって形成された河川段丘と北側を東西に横断する小規模な旧河川の一時的な河川段丘に立地しており、標高は約233mを測る。地形は西から東に傾斜しており、河川との比高差は7mある。

本遺跡は西に隣接する大浦B、それに旧河川の対岸に位置する大浦Dの3遺跡とともに大浦遺跡群を構成している。大浦遺跡の総面積は東西約600m、南北約300mに分布すると推測され、総面積は約180,000m<sup>2</sup>を有する。特に3河川と旧河川によって区画された東西に延びる自然堤防状の微高台地内にある大浦A・B・C遺跡は一括されるものと思われる。

遺跡周辺の環境としては、まだ水田や畠などを残しているが、遺跡群を東西に分断する形で県道が走っており、また昭和62年（1987）に市街地からの道路の接続に伴い、米沢市街地への北側玄関口として市内でも交通量が多く、郊外型の店舗が進出、著しく毎年環境が激変する地域である。

第2図で示すように大浦A・B・Cの遺跡群（以下大浦遺跡）は今年度までに第16次の調査を実施している。今回報告する大浦Cは過去に4回実施され、第V次調査となる。第I次調査は1984年（昭和59年）に実施されている。これまでの大浦C遺跡の調査概要を述べると以下のようになる。

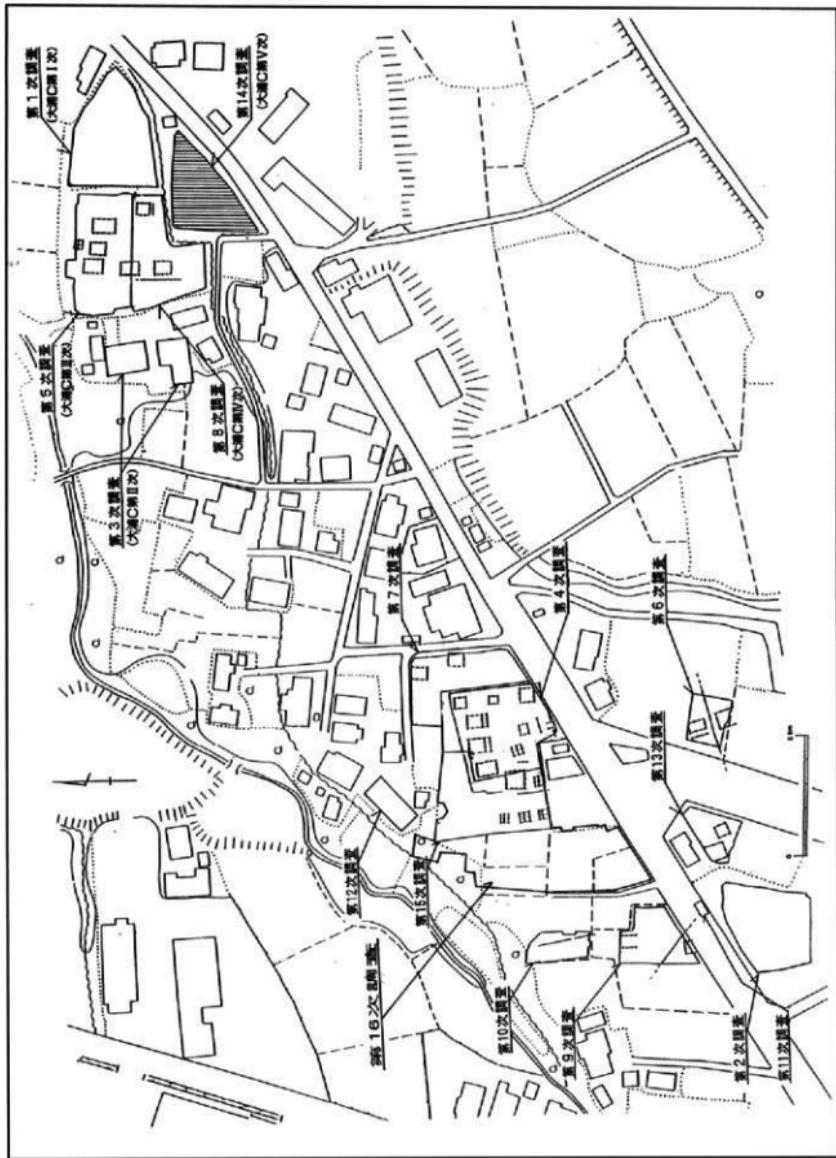
第2図に示すように大浦遺跡の東端に位置する箇所である。個人の駐車場造成に伴う緊急発掘調査として、昭和59年（1984）の6月15日～7月2日の期間で発掘調査を実施している。調査面積は1,600m<sup>2</sup>であり、検出遺構としては第3図の奈良期溝状遺構4基、同小ピット23基、出土遺物としては土師器壺1点、須恵器1点、土師器・須恵器片950点、布目瓦2点、石器剥片1点、木簡1点（文字は認められなかった）、木器4点が出土している。

第II次調査は平成元年（1989）の4月3日～同年4月28日の期間で実施された。個人の住宅建設に伴う緊急調査であり、第2図に示す2箇所を発掘調査した。第4図が検出遺構で、中世期溝状遺構15基、同土壙2基、同柱穴161基、同小ピット46基、近世期流場跡3基が重複して確認された。検出遺物としては須恵器5点、近世・中世陶磁器一括20点、同片600点、古銭13点、砥石31点が認められた。

第III次調査は次年度の平成2年（1990）に実施している。個人の基礎整備に伴う緊急調査であり、4月20日～5月30日、7月12日～同年9月14日の調査期間で、1,200m<sup>2</sup>を発掘した。第2図に示す箇所であり、検出遺構としては奈良期掘立建物跡9棟、同土壙8基、同池状遺構10基を検出している。遺物は第IV次調査と一括して説明する。

第III次調査の断続として実施したものであり、第4図に遺構全体図を示した。調査期間は4月22日～7月26日で、調査面積は1,100m<sup>2</sup>について発掘を実施した。検出遺構としては、奈良期掘立建物跡11棟、同土壙14基、同池状遺構3基、同柵列1条、同溝状遺構4基、近世溝状遺

第2图 大连港防震区全体图



構15基、同墓壙4基、土壙1基が検出された。

検出遺物としては、土師器・須恵器一括土器19点、同破片4,728点、布目瓦3点、中近世陶磁器6点、同破片413点、同木製品56点、石範1点、石匙1点、その他10点、古錢7点が認められた。以上がこれまで実施された成果の概要である。今回調査を実施した箇所に隣接する発掘成果であり、これらの遺構、遺物を加味しながら以下に述べたい。

## 2 調査の経過

調査対象となった場所は以前は住宅地として利用されたところであり、家を取り壊して集合住宅を造成することになった。12月8日から調査を開始した。調査はまず家の土台石の除去から始まった。人力では持てない位の大きな河原石であるため、重機を提供してもらい調査を進行させ、一日かかってこの作業を終了した。

調査箇所が三角形を呈するため、この地形に沿って基準杭を設置し、図面上で遺構等を接合させることにした。土を捨てる場所がないことから、他の場所に運搬する方法で調査を進めるうことになった。12月という季節であり、土がなかなか乾燥しない状況での発掘調査であり、粘土質の土壤であることから現場を歩行するにも困難な状況を呈した。そんな中で調査を進行させ12月15日までに溝状遺構や土壙・ピット群の調査を終了した。

近代の井戸跡についても調査を実施しようとしたが、井戸の中に家屋解体の際の色々な物が混入して、引き上げが困難な状況であった。図面作成は断念し、写真撮影にとどめた。12月16日に遺物構成平面図を作成し調査を終了した。調査面積は216m<sup>2</sup>、調査期間は平成9年(1997)12月8日から同年12月16日の延べ9日間であった。

## 3 検出遺構【第7図～第9図】

今回の調査箇所からは溝状遺構KY1～KY6の7基、土壙はDY5～DY8の9基、ピット群P7～P15の8基が確認された。列挙した順に説明する。

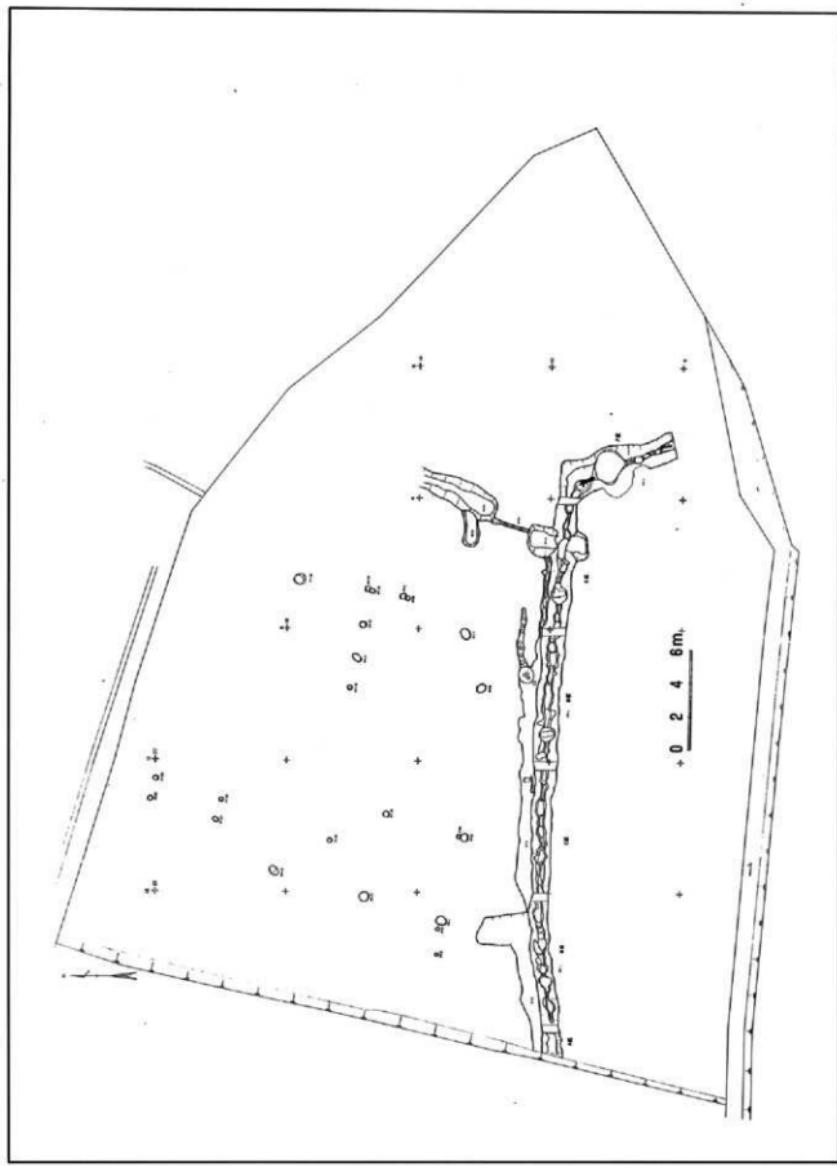
### 溝状遺構

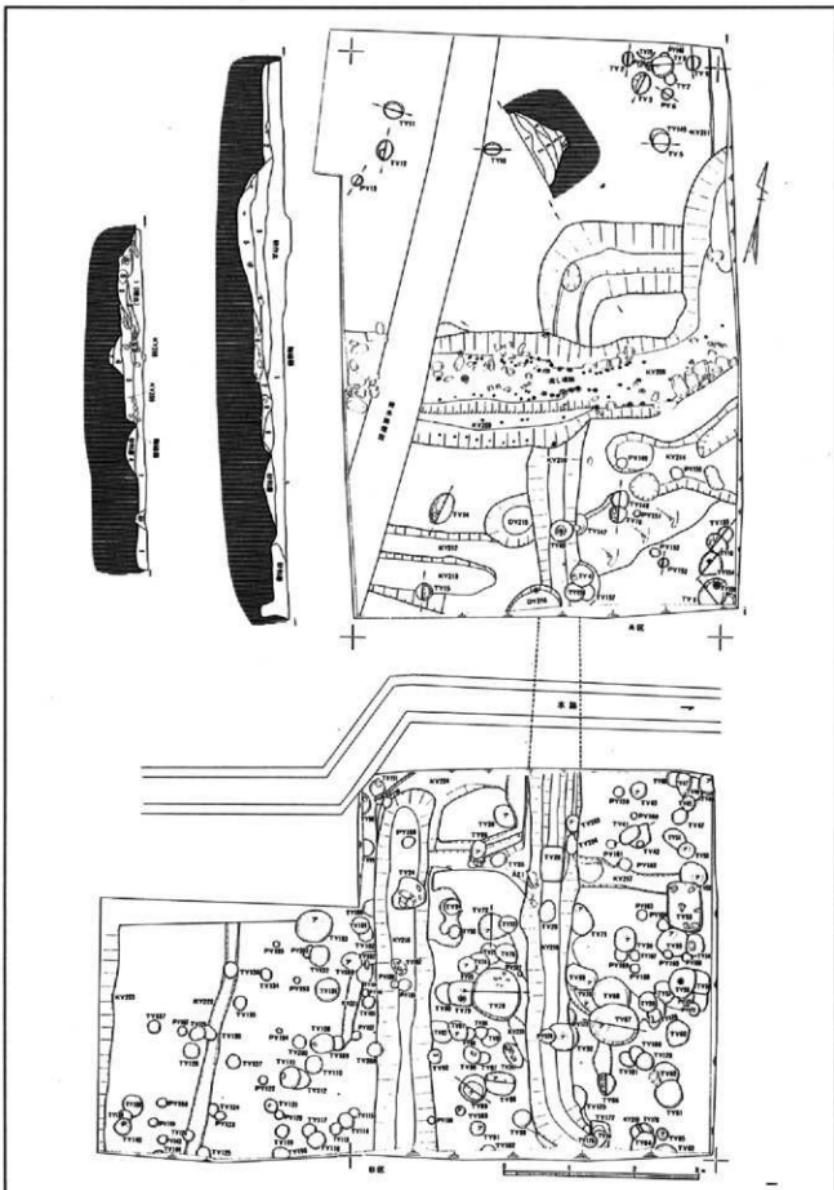
#### ◎KY1 [第7・8図]

調査の中央に位置し、東西に延びる。長さ12.7mにわたって確認され、東方部が削平されているが、現況から考慮して延長するものと推測される。幅は東側が幅広く80m、西側がやや狭く60m、深さは22mを測る。断面形態は「U」字形を呈し、西方箇所でKY2・4・6と重複する。この箇所に現代のタメ池があるので重複関係は明確にできなかった。

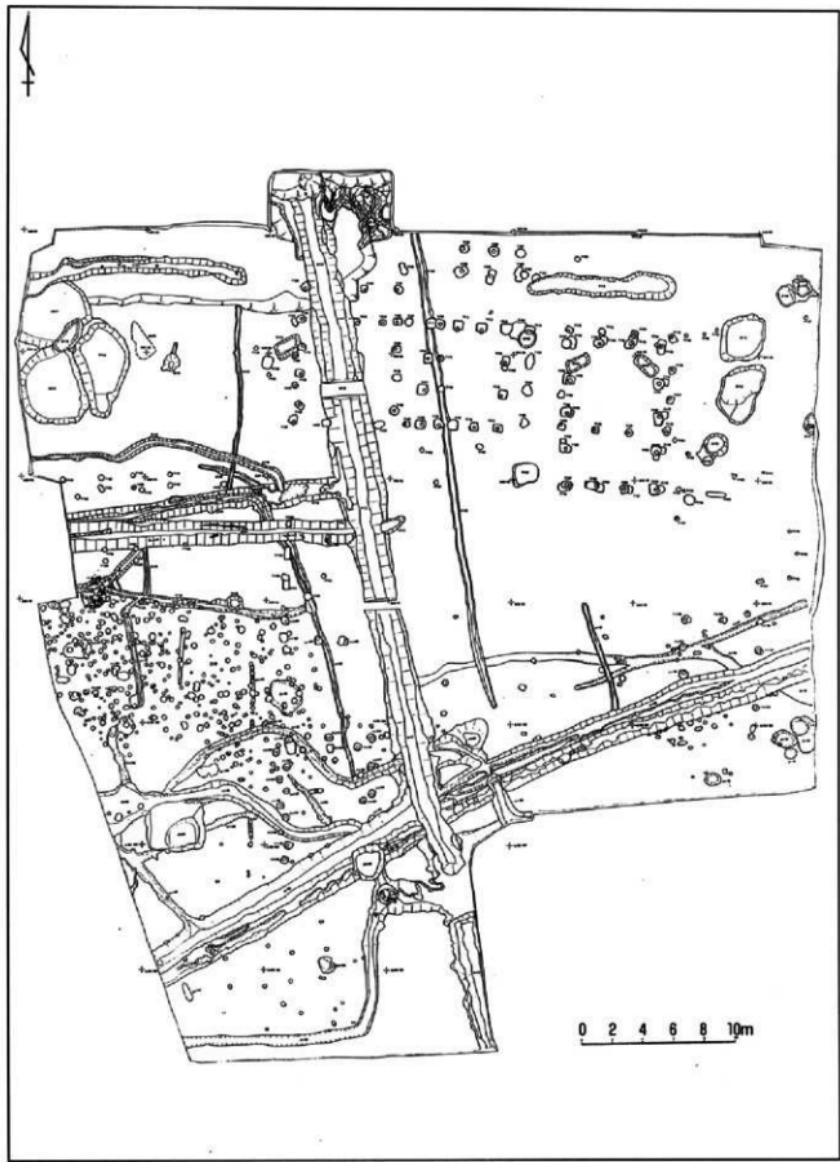
覆土は3層に区別され、自然堆積状況を呈する。色調は1層が黄褐色で地山の土を霜降り状に含む。2層は暗黄褐色を呈する。3層は暗黄褐色に地山の土が混合した土色であった。覆土からの出土遺物は小破片で占められ、土師器壺片1点、須恵器壺片1点が西側から認められた。東方からは内黒坏片2点、土師器坏片1点、土師器壺片1点、須恵器壺片1点が出土している。覆土や出土遺物から判断して奈良時代の遺構と考えられる。大浦遺跡はこの時期をI期からIV期に区別できることが遺構や遺物等の吟味から判明している。しかし、今回の調査区

第3圖 大洞C道跡第1次調查區遺構全體圖



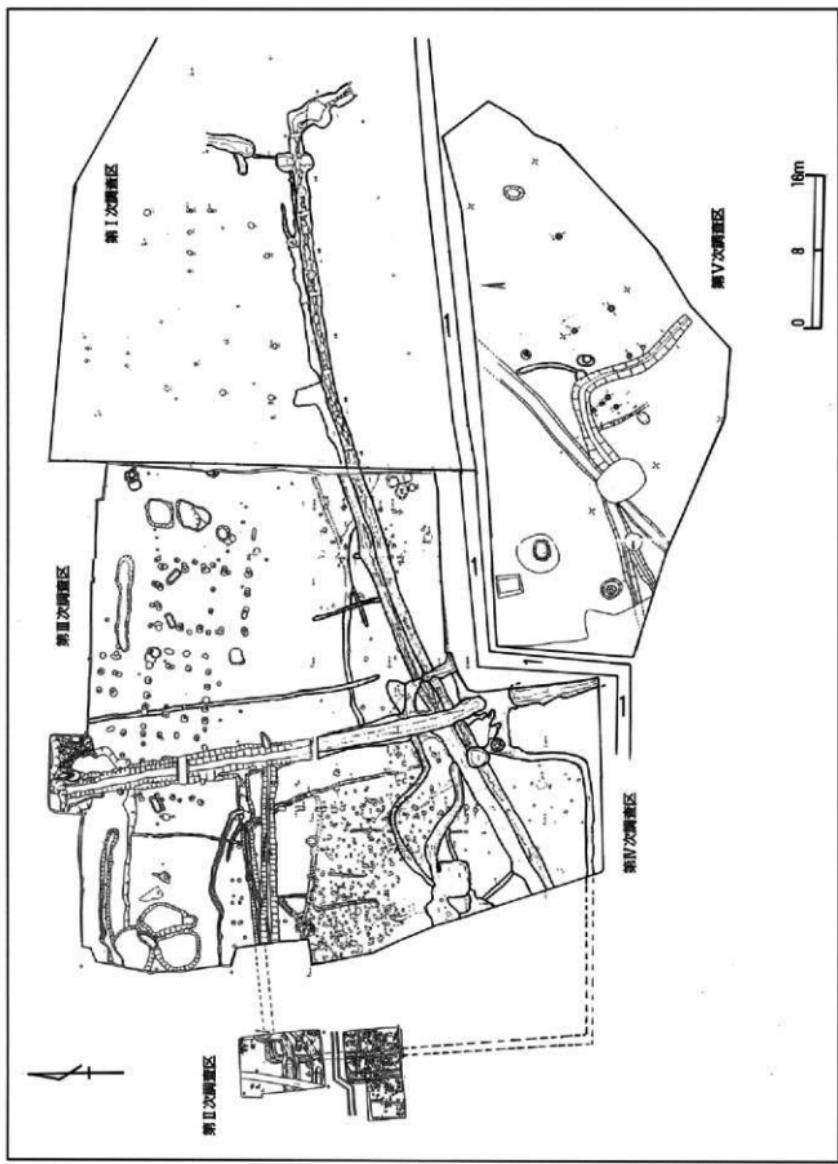


第4図 大浦C遺跡第Ⅱ次調査区遺構全体図



第5図 大浦C遺跡第III・IV次調査区遺構全体図

第6図 大浦C遺構全体図



の奈良時代の遺構がⅠ期からⅣ期のどの時期に相当するかは、前述した遺物の状況から明確には言えない現況であった。

◎KY 2 [第8図]

西から東に延び、南に曲する溝状遺構である。東西に4.6m、南北6.6m確認され、南方に延びる様相を呈する。幅は北方で1m、南方で70cm、深さは24cmを測る。覆土は4層認められた。1層は黒褐色、2層は黒褐色、3層はにぶい黄褐色、4層は褐色の色調でいずれも少量の炭化物を含む。遺物は2・3層から土器片4点が出土している。いずれも小破片で磨滅が著しい状況であり、調整法も判断できなかった。年代としては覆土に炭化物を含むことから大浦Ⅱ期に併行すると考えられる。大浦Ⅱは奈良時代末葉から平安初頭の年代である。

◎KY 4・6 [第8図]

前述したKY 2と交差する箇所が現代のタメ池によって削平され、両者の関係が判断しにくい状況になっている。形態から判断して、KY 1に関連するのがKY 4・6と考えられる。遺物は認められなかった。今回の調査区において、奈良・平安時代に位置する遺構は前述したKY 1・2・4・6であり、他は近世・近代の遺構群である。以下に近世・近代の遺構について述べる。

◎DY 5 [第8図]

平面形状が長円形状を呈する土壙であり、長径1.1m、短径90cm、深さは1.1mを測る。ほぼ直角に立ち上がる壁面で底面が幅が狭くなる掘り方である。人工堆積状況を示す覆土であり、7層認められた。全体的にやわらかい土壙であり、灰黄褐色が主体をなす。遺物は認められなかった。構築目的は不明である。

◎DY 6 [第9図]

調査区の東側に位置する土壙であり、長径1.1m、短径70cmの長円形状を呈する。深さは40cmであるが、確認面が削平されていることを考慮すれば構築時の深さは約70cmと想定される。覆土は人工堆積であり、3層確認された。1層は灰黄褐色、2層は暗灰黄褐色、3層は暗オリーブ褐色であった。2・3層からは陶磁器片4点、硯1点、流れ込みと思われる土師片1点が出土している。覆土状況から近世の墓壙と考えられる。

◎DY 7 [第8図]

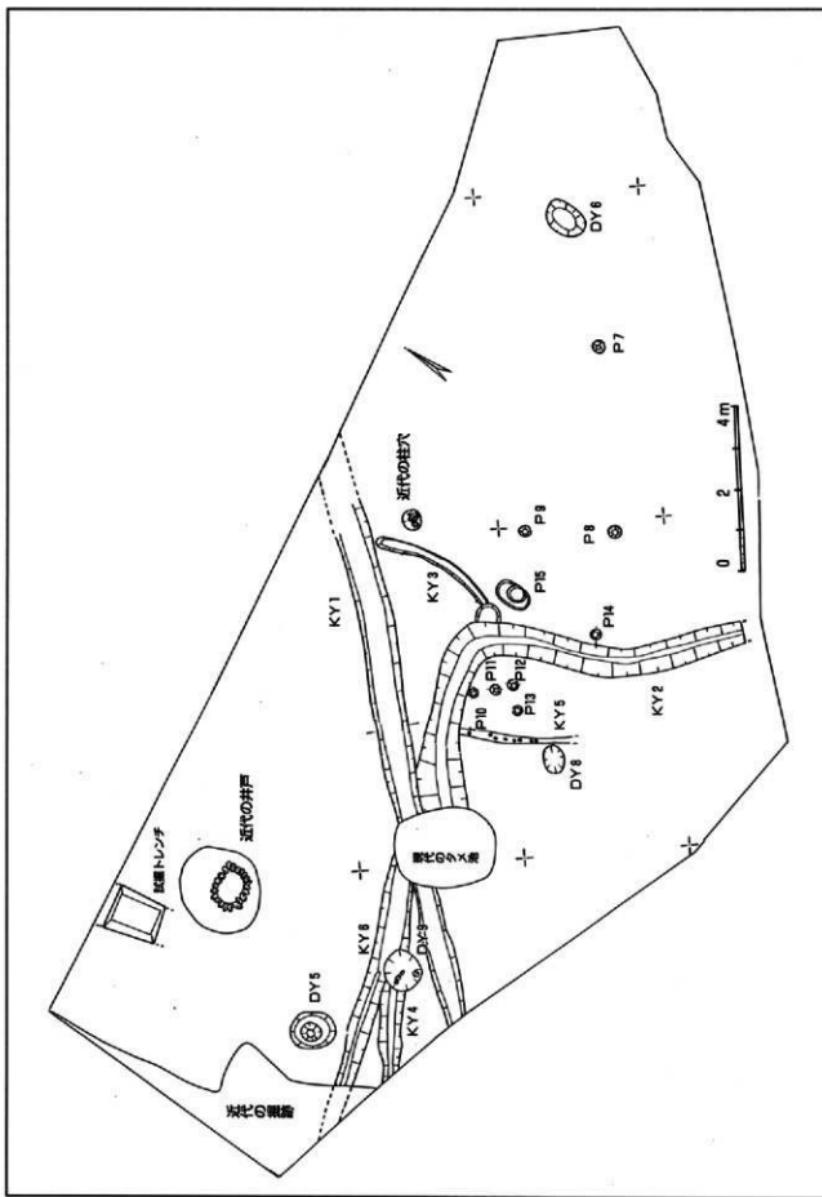
KY 4・6を掘り込んで構築した土壙であり、円形を呈する。長径1.0m、短径90cm、深さ10cmと浅い。覆土から遺物は認められなかった。

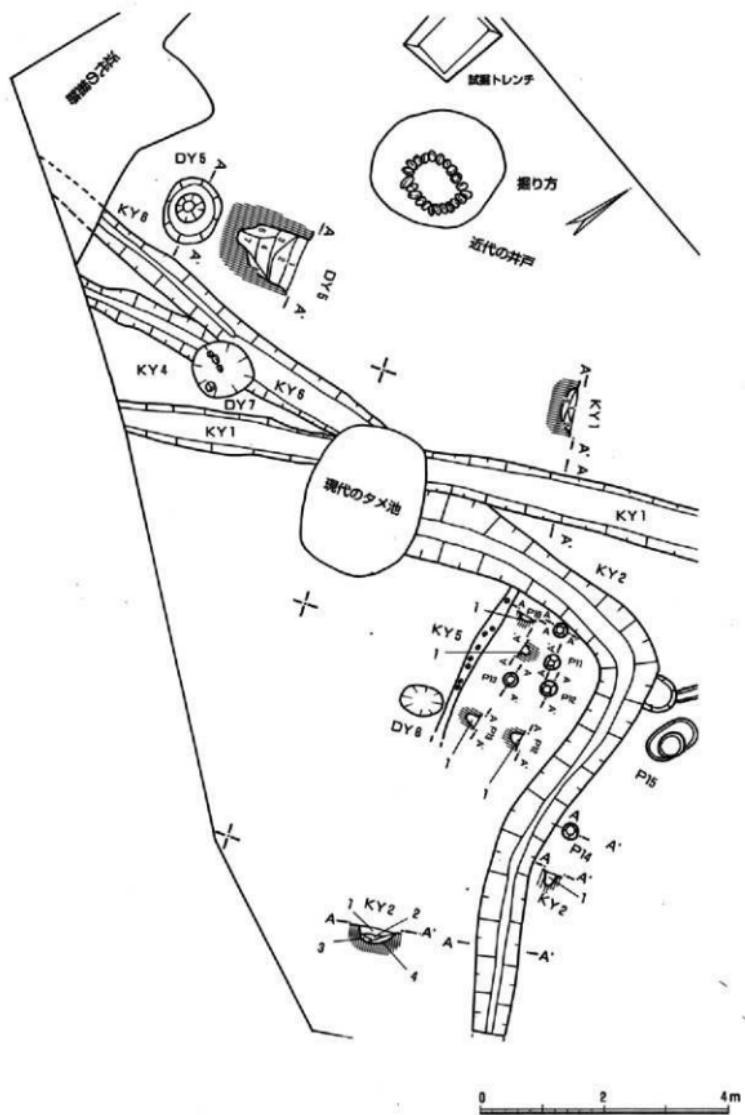
◎ピット群 [第8・9図]

10基を確認している。平面形状が円形を呈し、長径20cm、深さは10~20cmと深い形態である。お互いに関連性は見いだせなかった。覆土は1層で暗灰黄褐色を呈する。

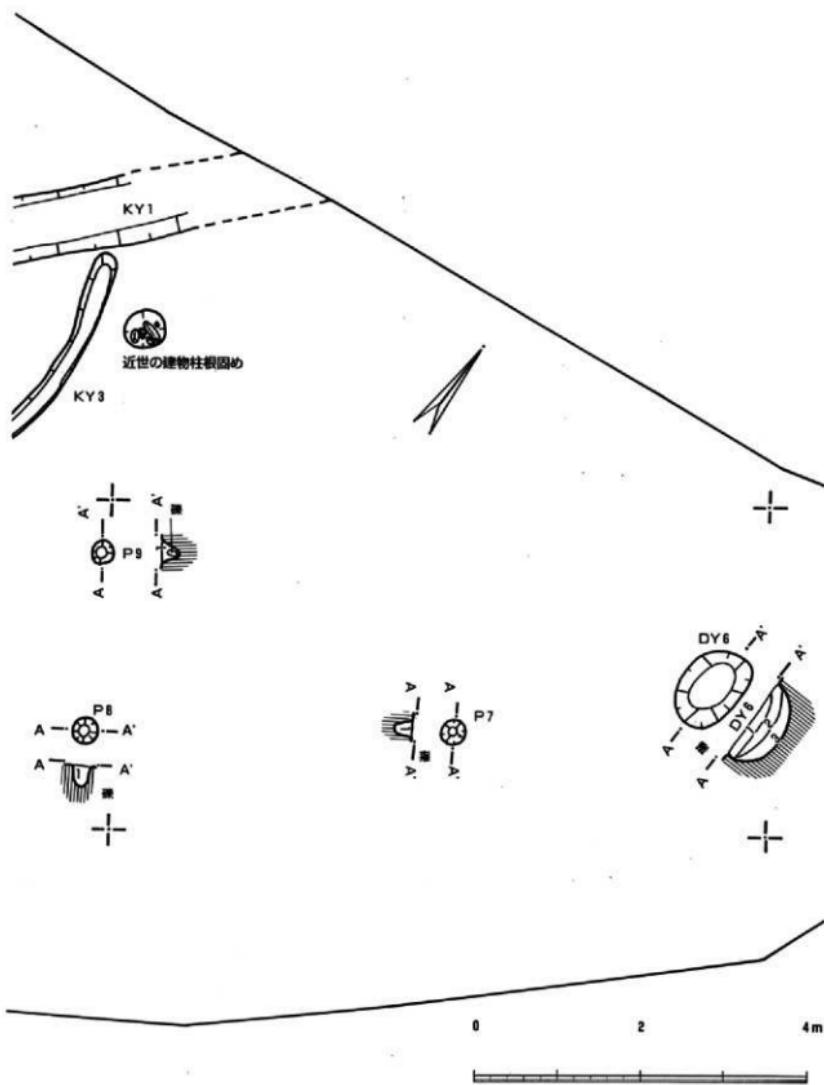
KY 3・5は幅が20~25cm、深さは10cm未満の深い形態の溝状遺構であり、覆土から判断して、近代に位置する遺構と考えられる。遺物は認められなかった。また、ピット群との関連性も明確にできなかった。今回の調査区からは以上述べた遺構群が検出され、奈良・平安・近世・近代に位置づけられる。中世期の遺構は認められなかった。これは第6図で示すように、区画以外の地域に相当することが要因に上げられる。

第7図 大浦C地質第V次調査区地質全体図





第8図 大浦C遺跡第V次調査区遺構平面図(1)



第9図 大浦C遺跡第V次調査区遺構平面図(2)

#### 4 検出された遺物

今回の調査区からは総数で56点出土している。時期別に見てみると、土師器42点、須恵器4点、瓦器質土器1点、近世陶磁器9点、硯1点であった。これらの遺物はすべて小破片で占められ、復元出来た遺物は1点もなかった。従って写真は割愛した。図示できた遺物は5点だけであった。そのことから以前、紙面の都合で報告できなかった大浦C遺跡第Ⅱ次調査出土遺物を図示し、今回出土の近世遺構と加味しながら説明したい。

##### ◎奈良・平安期の遺物 [第10図1・2]

この時期に位置する遺物は全体の8割を占める。出土した破片は土師器壺片が大半を占める出土状況であった。器形別に見てみると内黒土師器3点、土師器壺1点、土師器壺片39点となる。須恵器は壺片である。第1次調査出土遺物も破片が大半であったことを考えると、溝状遺構は一括土器や完形土器を含まないのが本遺跡の出土状況と言える。

図示した第10図1は有段を呈する内黒土師器であり、出土した口縁部片から復元図面を作成した。口径は15.7cm、器高6cmの丸底を呈する器形と想定される。大浦遺跡のA群I類土器に位置づけられる形態の土師器片である。A群I類土器は大浦編年のⅠ期に編年され、奈良時代初頭と想定される。大浦遺跡の遺構で言えば竪穴住居跡の年代で、官衙が造営される以前の遺物である。大浦C遺跡からの検出は認められないことや、KY1からの検出等から想定されば、上流からの流れ込んだ遺物と考えられ、竪穴住居跡は大浦C遺跡の西方に存在するものと考えられる。同図2は須恵器壺片であり、自然釉が認められることから、口縁部直下の破片と想定される。表裏面とも二次焼成を受け変色している。調査区からの出土であった。炭化物を含む溝状遺構KY2の存在を考えれば大浦Ⅱ期に併行する遺物と考えられる。Ⅱ期は官衙が立て替えられた時期に相当し、奈良時代末葉から平安初頭に位置づけられる。

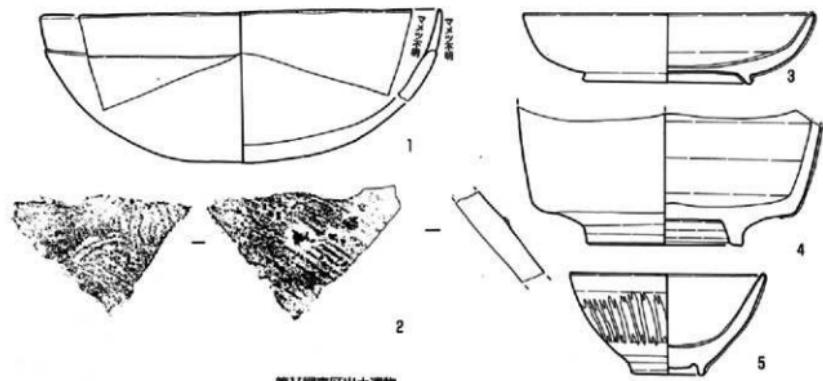
##### ◎中世期の遺物

瓦器質土器片が1点認められた。小破片であることから器形を不明と言わざるを得ない。中世期は今回調査を実施した北側の箇所に第Ⅲ・Ⅳ次調査によって堀跡が確認されている。最下層から内耳土壙が出土しており、中世期に位置する堀跡と考えられている。今回出土した遺物は焼成が良好でこの内耳土壙よりは年代が上がると判断される。

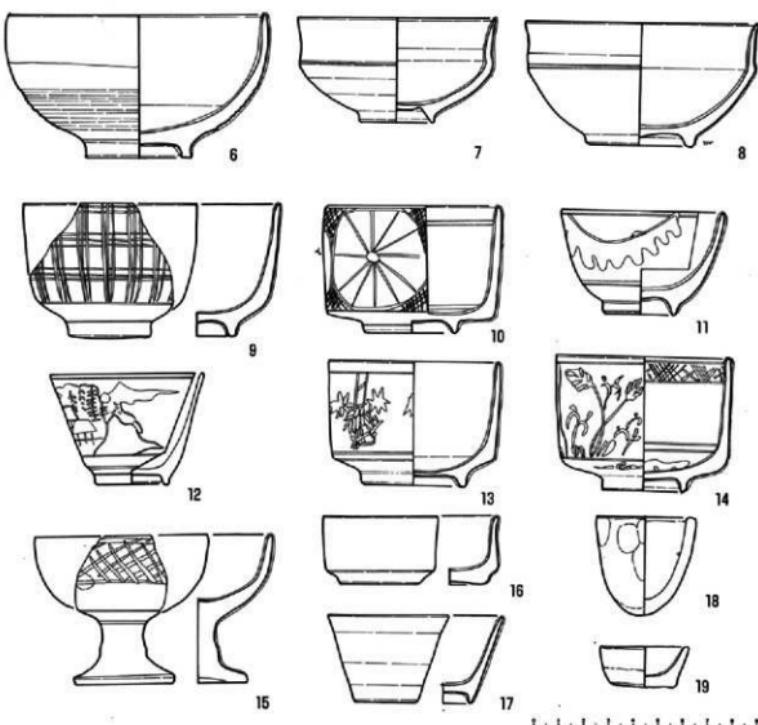
##### ◎近世・近代の遺物 [第10図3～19～第15図]

第6図で示すように大浦C遺跡からは奈良時代の掘立建物跡を始めとし、近世・近代に至るまで数多くの遺構・遺物が確認されている。その中で、奈良・平安・中世の各時期については詳細に報告してきた。しかし、前述したように紙面の都合から近世・近代については報告できなかった。今回はその時期について述べる機会を得たので説明したい。

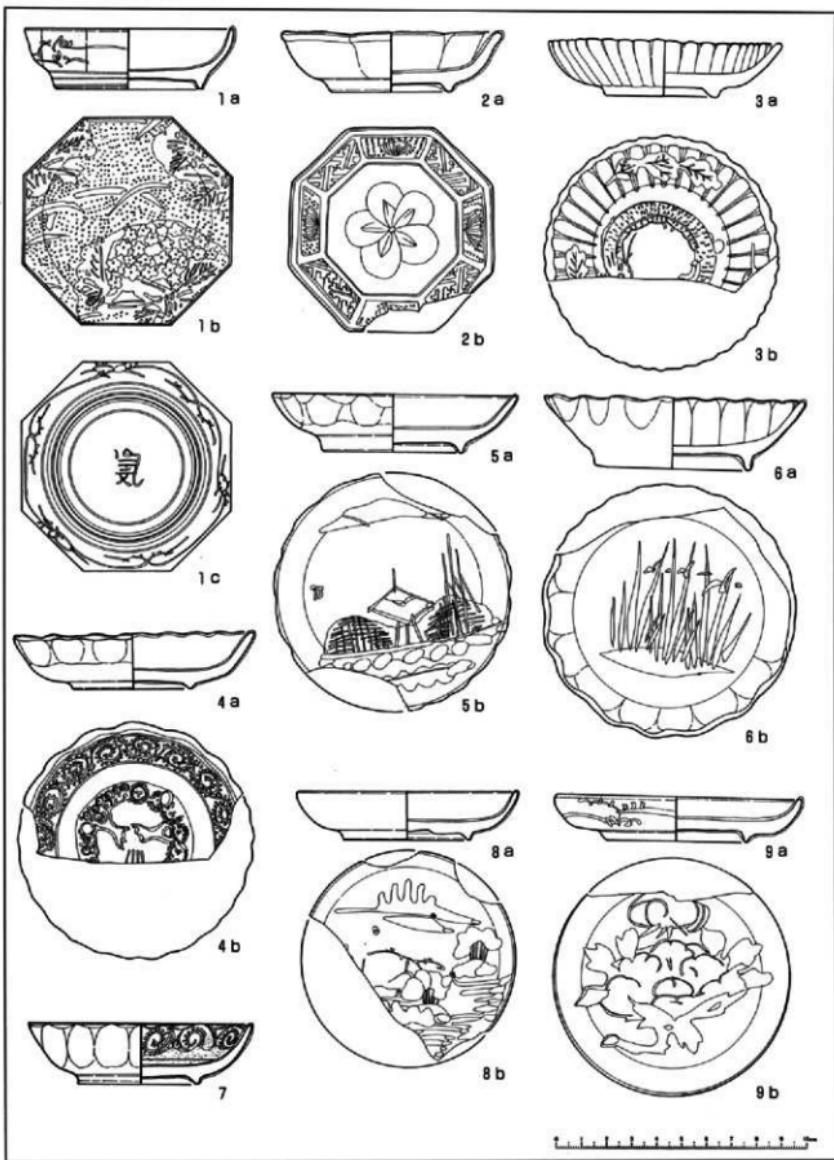
まず、遺構から考えると、今回の調査箇所と第Ⅱ次調査箇所は現在も家が建っている場所であり、近世・近代の遺構が現代と重複していることがうかがえる。第Ⅱ次調査は近代の流し場跡であり、そこに多量の近世陶磁器が廃棄された状況で発見された。それらを図示したのが第10図から第15図までの実測図である。これらの遺物を吟味することによって、大浦C遺跡における近世・近代が見えてくるような期待がある。



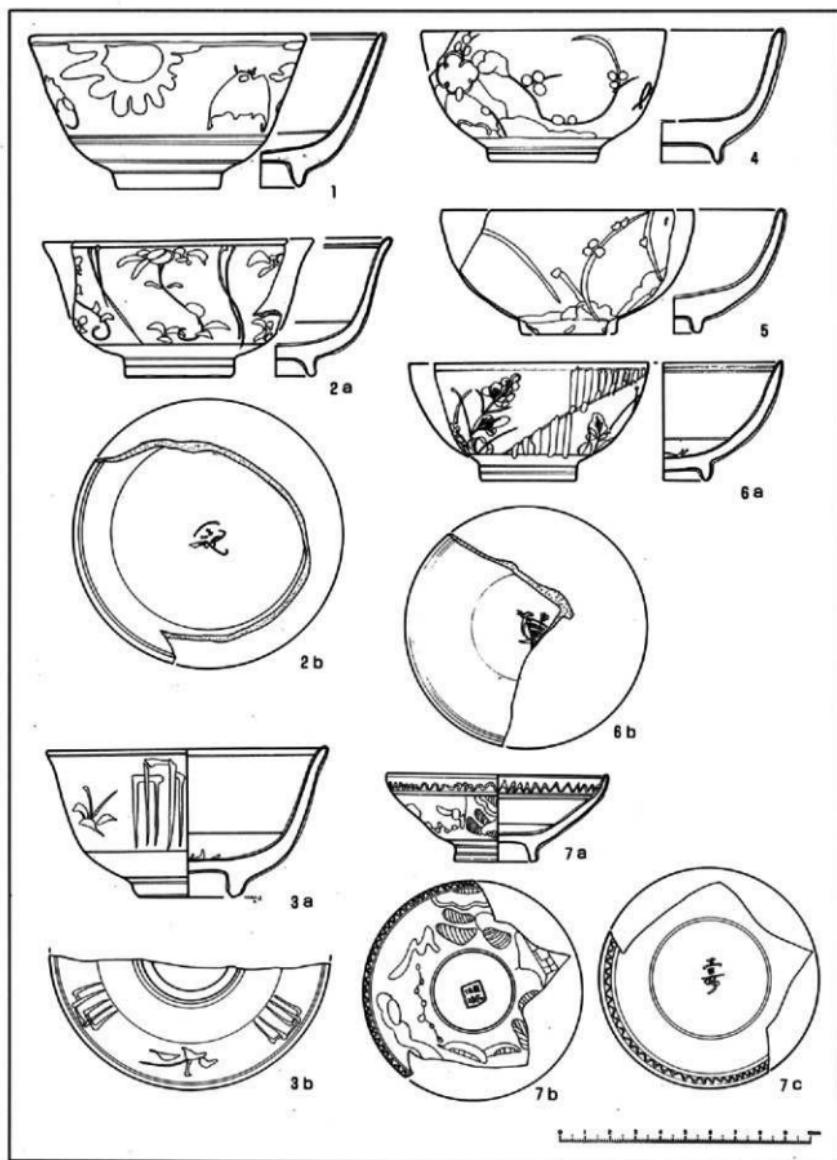
第V調査区出土遺物



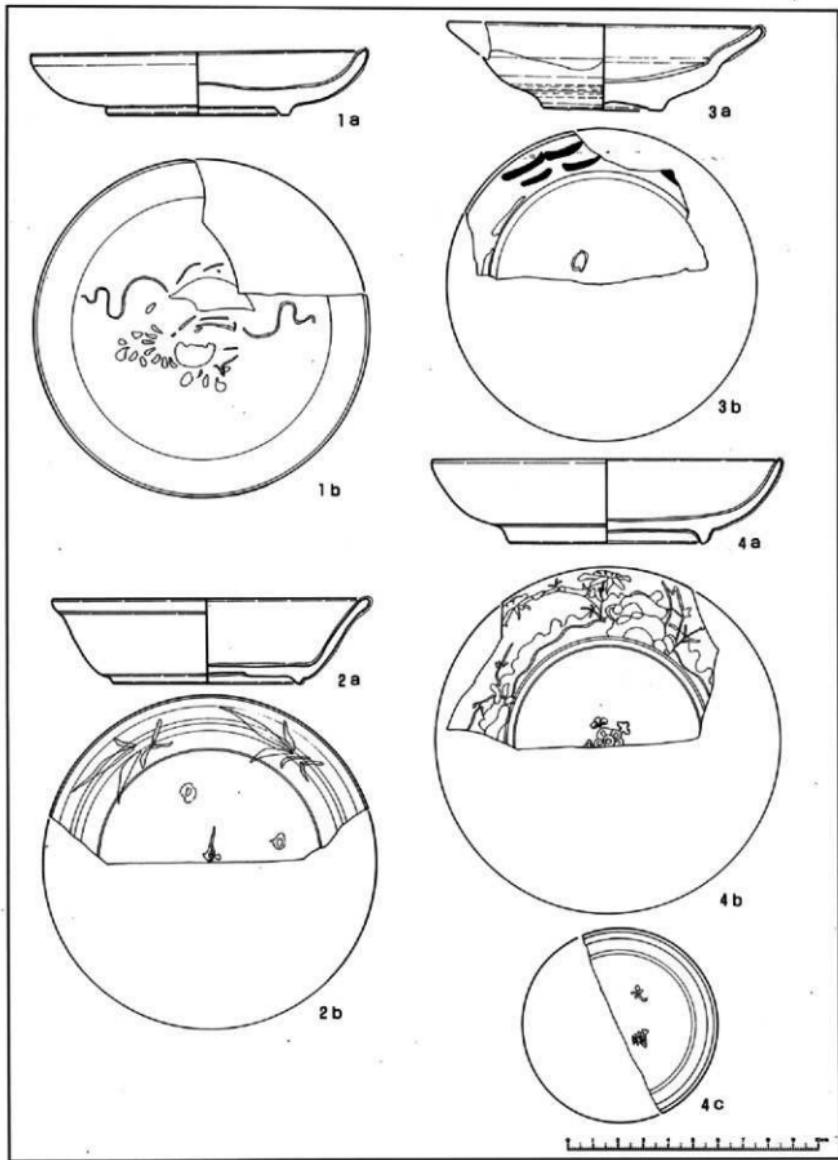
第10図 大浦C遺跡第III・V次調査区出土遺物実測図(1)



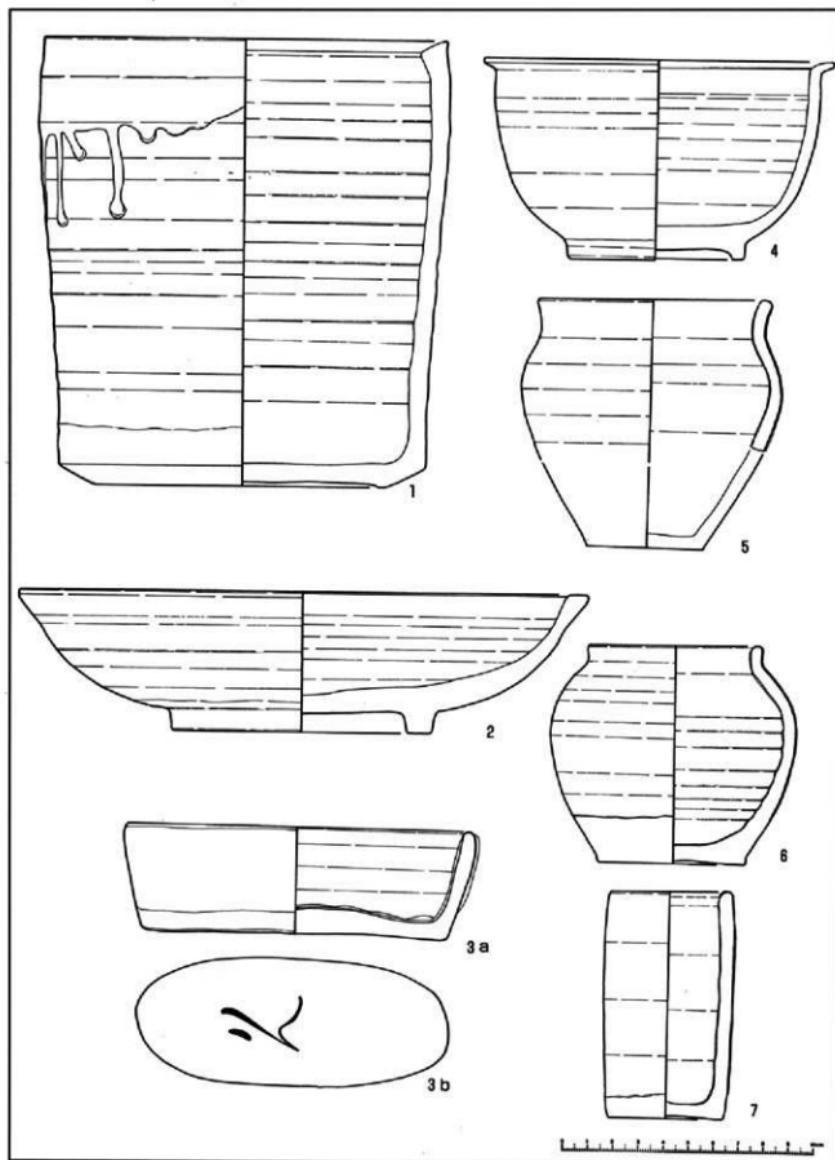
第11図 大浦C遺跡第Ⅲ次調査区出土遺物実測図(2)



第12図 大浦C遺跡第Ⅲ次調査区出土遺物実測図(3)



第13図 大清C遺跡第3次調査区出土遺物実測図(4)



第14図 大浦C遺跡第Ⅲ次調査区出土遺物実測図(5)

## ◎器形による分類

供膳具類、茶碗類、飯碗類、皿類、鉢類、小形壺類、切立、筒形類、摺鉢類の9形態が認められる。これらは一括廃棄された遺物である。伝世品も含むことを考慮すれば近世から近代に位置する陶磁器類である。列挙した順に説明を加えたい。

### ◎供膳具類 [第10図15 第11図1~7]

神仏にそなえる陶磁器類である。第11図示1~7は型押し整形による製品であり、明治初期の製作と考えられる。文様は蜻唐草文様の4・7、龍を中心配した3がある。窯場としては山形市の平清水焼、宮城県宮崎町の切入焼等の製作と考えられる。第10図15は相馬焼と考えられ前述した供膳具類よりも古い段階と考えられる。

### ◎茶碗類 [第10図5・6~14 第12図4~7]

今回の調査区からの出土で第10図5もある。緑色を呈する色調で外面中央に維持の文様を連続して施文した湯呑茶碗である。釉から判断して明治以降の製作と考えられる。窯場は不明である。他は伊万里系と推測される。その中で第12図4・5は底面の器厚な形態であり、古伊万里である。第10図6は湯呑茶碗よりは飯碗に近いと考えたい。

### ◎飯碗類 [第12図1~3]

すべて染付文様を有する形態である。1は吳須の色調から明治以降と考えられる。焼成窯は不明である。2・3は切込焼と考えられる。幕末から明治初期の製作であろう。

### ◎皿類 [第10図3 第11図8・9 第13図1~4 第14図2・3]

小皿の第11図8・9、中皿の第10図3、第13図1~4、大皿の第14図2、長皿の同図3の4器種に細別される。小皿は風景画やボタンの花を表現した文様を有する。有田焼の製品と考えられ、化学染料を使用していることから、明治以降の製作と考えられる。中皿としては今回出土した第10図3がある。白磁の中皿で年代、焼成窯とも不明である。第13図2は蛇目高台を有する切込焼笠文丸皿である。幕末の製作と考えたい。第13図3は絵唐津の中皿であり、高台がスリ減っていることから判断して長期にわたって使用された痕跡を呈する。伝世品であろう。製作年代としては江戸中期と推測したい。同図1は紫色の釉をほどこした中皿である。肥前焼と見られ江戸中期であろう。同図4は「大明年製」と記した国産品で伊万里焼である。中皿によくみられる環珞文が認められる。江戸後期の製作であろう。

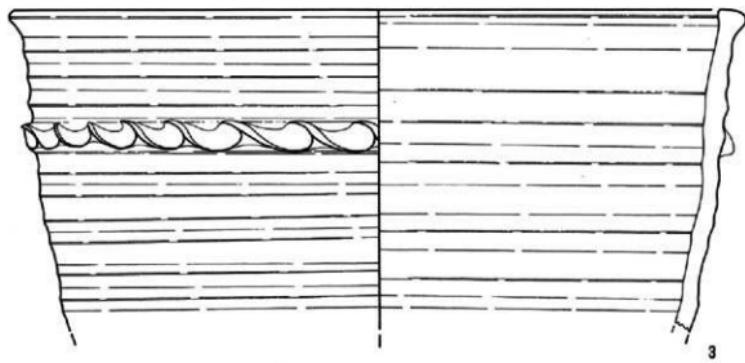
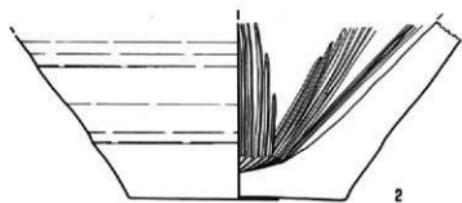
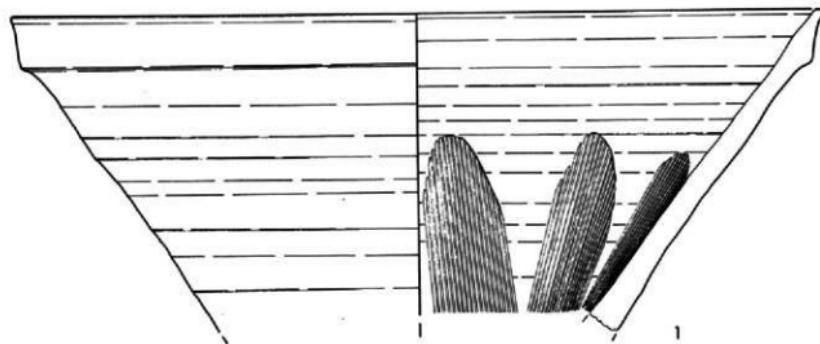
大皿は第14図2である。焼成窯、年代は不明である。同図3は宮城県玉造郡岩出町の上野目焼の製品と想定される。底面の裏に「りん」の文字が見え、持主を表すものと考えられ、髪をとかす際に用いた水入と考えられる。

### ◎鉢類 [第14図4]

わら灰釉をかけた製品で片口の器形を呈するものと考えたい。相馬焼と考えられる。年代は幕末と考えたい。

### ◎小形壺類 [第14図5・6]

2点を作成した。その中で6は米沢市の成島焼である。成島窯は安永9年(1722)に開業された米沢藩の窯であり代々相良家が担当した。今に残る相良人形の祖先である。昭和15年頃ま



第15図 大浦C遺跡第III次調査区出土遺物実測図(6)

で操業していた。塩入に用いられた壺などと考えられる。

#### ◎切立 [第14図1 第15図3]

成島焼の切立第14図1と緑灰釉の第15図3が認められた。3は口縁直下に竹のたがを模した文様を粘土紐で表現している。江戸時代初頭から見られる代表的な文様である。相馬焼と考えられ、江戸時代後期の製作であろう。切立は日用雑器の中でも味噌や梅干しを入れ容器として使用された。

#### ◎筒形陶磁器類 [第10図4 第14図7]

今回の調査区から出土した4は内面に釉をかけない形態である。この形態は香炉や煙草盆火入に使用された容器に見られる製作法であり、4も二通りの用途が推測させる。暗緑灰色の釉を外面だけに掛けている。第14図7は成島焼の製品で完形である。成島焼の製品は摺鉢、片口切立等の大形の製品が多く、湯呑や飯碗等の小形の製品が少ないと想われており、7のように小形の製品はめずらしいと思われる。厚味のある口縁部形態であり、湯呑茶碗としてよりも一輪差しの花瓶と考えたい。両者とも江戸時代後期の製作であろう。

#### ◎摺鉢 [第15図1・2]

岸窯製品と戸長里窯の製品が認められる。前者は第15図2である。福島市飯坂の岸窯は1644~1648年に期間で操業した窯である。一方、戸長里窯は米沢市田沢字戸長里に所在する窯であり、江戸時代初頭の年代が考えられている。操業期間は短期間と考えて、謎の多い窯である。岸窯の製品は大浦C第III・IV次調査からも出土している。器形としては香炉が多く、次いで摺鉢、鉢類等がある。

その他としては第10図16・17の猪口、18・19の取り堀がある。猪口は釉の観察から明治以降に位置づけられる。18・19は精練に関する遺物である。

## 5まとめ

大浦C遺跡は今回の調査を含め5次を数える。一連の発掘調査によって得られた成果を時期別に検討しまとめとしたい。遺構・遺物から判断して、奈良・平安時代・中世期・近世・近代の各時期に大別される。大浦遺跡としては遺構が最多である奈良・平安時代を第I期から第V期までに細類している。しかしながら、中世期・近世期になると、まだ不明な点が多い現状である。それらのことも含めて、第6図に示した大浦C遺跡遺構全体図を中心に説明したい。

#### ◎奈良・平安時代

第2図で示した第4次調査区が中心と考えられる。柵列で区画した掘立建物跡は2回の建替えが認められる。掘立建物跡と重複して竪穴住居跡が存在することから、第I期を竪穴住居跡の年代と想定している。大浦C遺跡からは竪穴住居跡は発見されておらず、遺構としては第II期から構築されたことになる。第III次調査区の北東部に位置する掘立建物群である。明確には第5図参照願いたい。第IV次調査区の西方に集中する中・近世期の掘立建物を構成する柱穴と比較すると奈良・平安時代の方が掘り方が大きいことが理解される。不思議なことに、奈良・平安期と中・近世期が重複することなく構築された様相を呈している。

Ⅲ期の遺構も大浦C遺跡に見ることができる。Ⅱ期と同様な場所に重複して構築された様相を呈する。Ⅱ・Ⅲ期は官衙が建設された時期に相当し、奈良時代末葉から平安初頭に位置づけられ、奈良・平安時代の建物が最も多く認められる。

大浦C遺跡の特徴として、Ⅱ・Ⅲ期に併行する溝状遺構群がある。第3図に示した溝状遺構であり、最初に発見された遺構である。重複し、東端部で南に曲がる。西方についてはまだ延びる様子であり、確認されていない。溝状遺構は大浦C遺跡調査区内でしか確認されていない。今回の調査区の溝状遺構もⅡ・Ⅲ期に併行すると想定される。地形的にも大浦C遺跡の箇所が低いことから考えても西から東へ流れる。

第Ⅰ次調査区及び第Ⅳ次調査区に確認した溝状遺構の南側には掘立建物跡は存在しない。今回の調査区においても認められないことは、南方には建物は構築されなかつた可能性が強いと言える。

Ⅳ期としては土壙群がある。建物跡と隣接して構築されている状況は他の地域と類似する。官衙が移転する際に出た不要物を廃棄するための土壙群であり、大半の重要な遺物はこの土壙群覆土の出土であった。建物跡が存在しない今回の調査区からは、認められなかつた。

Ⅴ期の遺構は大浦C遺跡にまだ確認されていない。Ⅴ期は平安時代中葉に位置する年代であり、今回の調査区からも認められなかつた。その後、遺構が構築されるのは中世期の内耳土壙の時期である。大浦C遺跡の北東箇所に「館」の字名があり、現在は国道13号線が南北に横断している。第Ⅰ次調査区の北方は「堤」の字名で堀も存在をうかがわせる地名である。

これらの字名を照査する遺構が第Ⅱ次～第Ⅳ次調査区に認められた。第6図で示すように今回の調査区の西方箇所に隣接する溝状遺構がある。現況は現代の堀が重複しており、調査が困難であった。中世の遺構は第Ⅱ次調査区からも確認されている。近世の流し場と重複して検出され、第Ⅲ次調査から延びる溝状遺構が南に曲する箇所にある。この溝に囲まれた範囲に柱穴群が集中する。第6図に仮想線を示した。35m四方の範囲が中世期の中心と考えられる。

溝状遺構からは岸塗製品が出土しており、近世期初頭まで継続した館跡である。館主についての伝承としては、「クマサカ」氏があるという。戦国期の置賜地方家臣団名に見当たらない人名である。館跡は置賜地区には数多く点在するが、その多くが館主不明である。時期的には伊達時代に相当すると考えられる。

大浦Cの館跡も構築時期はこの時期と推測される。近世期は上杉氏入部によって城下町が整備させる時期をもって、消滅すると考えられる。しかし、その後も大浦Cの地域は城下町に通じる北東玄関口としての役割を有し、今回発掘した箇所は関所跡の伝承が残る。この様に奈良・平安・中世・近世・近代・現代と継続して遺構が認められることは当地域が各時期において地理的条件から要所としての役割を果たしてきたことを物語っている。

現代もその点は受け継がれ、国道13号線、県道、市道が交差し、今にその様相を見ることができる。また、河川が集合するところもあり、奈良・平安においては舟運にも便利な地であったことがうかがえる。

次に遺物についてのまとめを述べたい。

## ◎奈良・平安期の遺物

今回の調査区からは破片しか出土していない。大浦遺跡としてはIV期の土壌を中心に出土している。土師器は甕片土器が多く認められる。須恵器は壺、蓋が多く認められ、甕・壺は破片で占められる。須恵器は米沢市下小管に所在する大神窯跡の製品とする考えが主流である。大神窯跡は平成5年に文化庁の国庫補助を受けて発掘調査が実施された窯跡である。多量の遺物が出土したことから平成10年に「大神窯跡」として報告書を刊行している。その論考によれば大浦編年を基準として関連遺跡を述べている。これは、大浦B遺跡から延暦23年(804)の具注暦との共伴須恵器と層位的に確認された米沢市の笹原、上浅川遺跡の出土須恵器の特徴を分析し、加味して作成したのが大浦編年である。

## ◎中世期の遺物

1点だけ認められた。遺物の出土量が少ないのは溝で囲まれた範囲の外に調査区に位置することによると考えられる。大浦C遺跡全体として見れば、第Ⅲ・Ⅳ次調査区に出土例がある。土器の他に木製の下駄も出土している。差し歛下駄の形態であり、米沢城東二の丸跡の溝状遺構覆土からも出土しており、形態も類似する。また内耳の土堀も共伴する点も同様である。内耳土堀の年代については諸論があり、断定はできないがあえて論じると次のことが言えよう。米沢城東二の丸跡の場合はほうろくと内耳土堀が共伴する。一方大浦Cの場合は内耳土堀だけではなくほうろくは認められない。内耳土堀はほうろくから発達したと考えれば、米沢城の出土例は、ほうろくと内耳土堀の両方が出土しており、年代的には若干古くなる要素を有する。

ほうろくは鎌倉時代から認められる遺物である。この時期から内耳土堀が出現するとした根拠は今のところない。米沢市の上浅川遺跡第I次調査区の出土内耳土堀は輸入陶磁器と共存している。仮に陶磁器の製作年代と併行させれば出現期は鎌倉時代に求められる。消滅時期は岸窯の年代17世紀中葉と考えられる。米沢藩主で言えば内耳土堀は伊達時代の遺物であり、上杉時代の前半で消滅するとするのが妥当と考えられる。

## ◎近世・近代の遺物

この時期の発掘例としては、上浅川遺跡、第3次調査、大浦C遺跡第II次調査、米沢城東二の丸跡調査等が上げられる。出土する遺物は陶磁器類に代表されるが、漆器も認められる。ただし、漆器は保存状態の悪い場合が多く資料として蓄積させるまで至っていないのが現状である。今回の調査区及び第II次調査区出土の遺物を中心について述べたい。出土遺物は吳須の色調から江戸時代、明治以降に大別される。江戸時代初頭としては米沢市の戸長里窯製品がある。出土遺物は摺鉢であり、使用されたものである。次いで古い形態としては、古伊万里、絵唐津、岸窯製品がある。江戸時代後葉としては米沢市の成島窯製品がある。他に相馬・切込、肥前が共存する。幕末になると平清水、切込、相馬、本郷と窯も増加していく。

今回の調査区も含め、遺物から言えることは、近世・近代まで続く集落跡である。問題は戸長里窯の製品に併行する陶磁器類である。出土状況からすれば古伊万里に併行するものと考えたい。桃山末～江戸初期の年代が与えられる。最後に、今回の調査でお世話になりました関係機関、駐車場を提供してくださった地元の方々に厚くお礼申し上げます。

## 参考文献

- 1981 手塚 孝他 米沢市埋蔵文化財調査報告書第7集「笹原」 米沢市都市計画課  
まんぎり会 米沢市教育委員会
- 1985 手塚 孝他 米沢市埋蔵文化財調査報告書第14集「上浅川」 1次・2次調査報告書  
米沢市教育委員会
- 1986 水野 哲 「戸長里窯跡」 まんぎり会  
手塚 孝  
村山正市他
- 1986 手塚 孝 米沢市埋蔵文化財調査報告書第15集「上浅川」  
菊地政信 第3次発掘調査報告書 米沢市教育委員会  
村山正市
- 1986 東北陶磁文化館 「東北の近世陶磁」 東北陶磁文化館
- 1987 手塚 孝 米沢市埋蔵文化財調査報告書第18集「大浦」 大浦A遺跡  
菊地政信 大浦C遺跡発掘調査報告書 米沢市教育委員会
- 1990 手塚 孝 米沢市埋蔵文化財調査報告書第27集「遺跡詳細分布調査報告書第3集」  
菊地政信 米沢市教育委員会
- 1991 手塚 孝 米沢市埋蔵文化財調査報告書第28集「遺跡詳細分布調査報告書第4集」  
菊地政信 米沢市教育委員会
- 1992 手塚 孝 米沢市埋蔵文化財調査報告書第33集「大浦」 大浦C遺跡発掘調査報告書  
山田 隆 米沢市教育委員会
- 1993 手塚 孝 米沢市埋蔵文化財調査報告書第36集「大浦」 大浦B遺跡発掘調査報告書  
菊地政信 米沢市教育委員会
- 1997 国立歴史民俗博物館研究報告「近世窯業遺跡データ集成」 国立歴史民俗博物館研  
究報告書第37集 国立歴史民族博物館
- 1998 手塚 孝 米沢市埋蔵文化財調査報告書第57集「大神窯跡」 大神窯跡発掘調査報  
告書 米沢市教育委員会
- 1998 月山隆弘 米沢市埋蔵文化財調査報告書第59集「大浦A遺跡」 発掘調査報告書  
米沢市教育委員会

## 報告書抄録

ふりがな	おおうらいせまほっくつちょうきほうこくしょ							
書名	大浦C遺跡発掘調査報告書							
副書名								
卷次								
シリーズ名	米沢市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第71集							
編著者名	菊地 政信							
編集機関	米沢市教育委員会							
所在地	〒992-0012 山形県米沢市金池三丁目1番55号 TEL0238-22-5111							
発行年月日	西暦2000年3月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東緯	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
大浦 C	山形県米沢市 中田町	6202	米沢市 遺跡番号 J-245	37度 56分 00秒	140度 07分 30秒	19971208 ~ 19971216	216	集合住宅 造成
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
大浦 C	官衙跡 集落跡	奈良時代 平安時代 中世	溝状遺構 4基	土師器 須恵器 陶磁器	官衙に関連する遺構 は認められなかった。 建物跡は検出されなかつた。			



# 写 真 図 版





▲ 遺構全景（西南から）



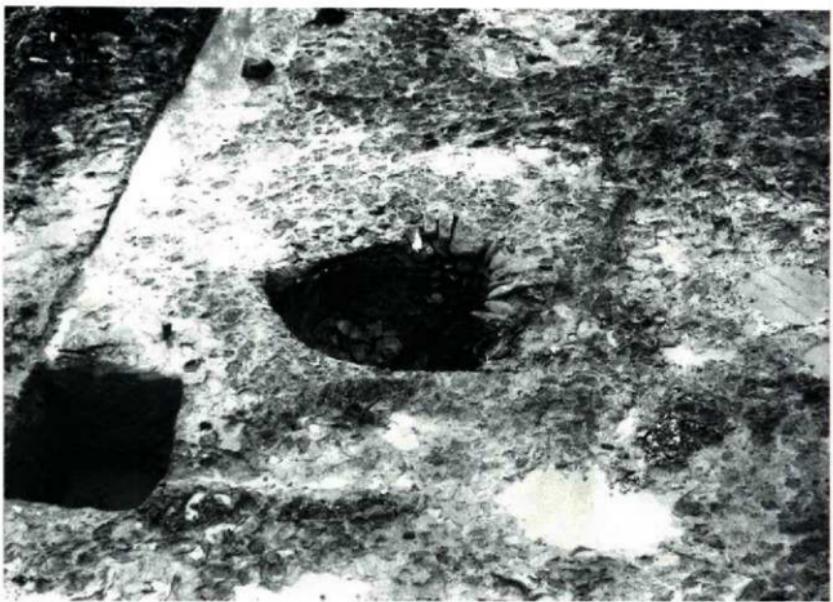
▲ DY 5・KY 4・6セクション状況（北西から）



▲ KY 4・6 セクション状況（西南から）



▲ KY 4・6 セクション状況近景（西南から）



▲ 近代井戸跡遠景（西南から）



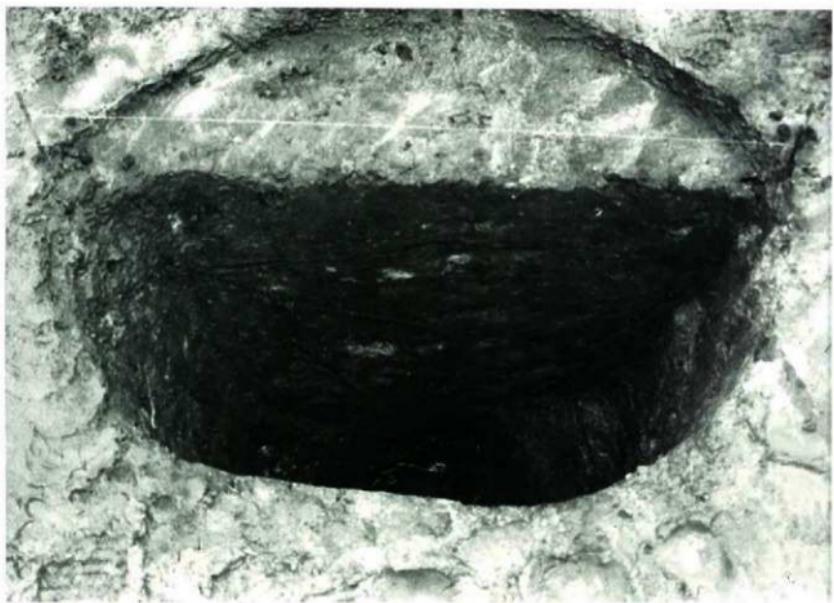
▲ 近代井戸跡遠景（西北から）



▲ KY1・2発掘状況（西方から）



▲ KY1近景（西南から）



▲ DY 5 半裁状況（西方から）



▲ DY 5 完掘状況（西方から）



米沢市埋蔵文化財調査報告書 第71集  
**大浦C遺跡**  
**発掘調査報告書**

平成12年3月24日印刷

平成12年3月30日発行

発行 米沢市教育委員会  
米沢市金池三丁目1-55  
TEL (0238) 22-5111  
(内線 7504)

印刷 株式会社羽陽印刷  
米沢市中央三丁目9-22  
TEL (0238) 23-0467